

松岡光治 編

『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化
——生誕二百年記念』

広島：溪水社、2010、7,500円、xxxvi+684頁。

足立万寿子

本書の意図は、書名『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』が示している通り、また本書の編者が「まえがきに代えて」の冒頭部で告げているように、ギヤスケル文学を通してヴィクトリア朝前半の時代精神と社会思潮を照射することだ。本書はこういう狙いを持って、イギリス19世紀ヴィクトリア朝時代の主として歴史、文化、中でも文学分野の専門の研究者32名が「巻頭言」と、編者の分けた各章（序章を含む）を担当して論述した論考を集めた論文集だ。編者の意図通り、ギヤスケルの文学からヴィクトリア朝前半の時代を読みとる論考がある一方、その逆、つまりこの時代を歴史書、統計書、新聞雑誌等の実録文献を通して示してから、それがギヤスケルの文学にどのように反映されているかを探る論考もある。中には、ギヤスケルと同時代の作家への言及のほうに熱を帯びているものもある。英語のタイトル（厳密には日本語の題とはややずれているように思える）が *Society and Culture in the Times of Elizabeth Gaskell: A Bicentennial Commemorative Volume* なので、「ギヤスケル文学を通して」いなくてもよいのかもしれない。またこれは、重点の置き方の違いであって、互いに切り離して考えられない問題だ。本書の各論考も程度の差はあれ、双方向から考察されている。

32名全員の各論考を取りあげるのは、紙面の余裕がない以上に評者の力が及ばない。評者の興味と能力に合わせて、序章と第三章は纏まりある一セットと見て取りあげ、あとは六部（第一部の「社会」から順に「時代」、「生活」、「ジェンダー」、「ジャンル」、「作家」と続く）それぞれの中から一章ずつ選んで、私見を述べたい。

序章 歴史 —— ヴィクトリア朝前半の時代とギヤスケル

時代を知るには、時代の基盤を成す経済構造を知る必要がある。本書の序章がその基本的経済構造を明確に示して、この書の基礎を固めている。序章の筆者は、

19世紀のヴィクトリア朝の歴史を考える上で最も重要なのは次の2点だと捉えている。要約すると、次のようになる。

1. この時期が工業化の時代だということ。

イギリスは18世紀後半からの産業革命によって生産の機械化と工場制度が確立し、それと共に都市化も進展し、農業社会から工業社会へと変貌をとげ、ヴィクトリア朝前半には高度経済成長段階に入った。ただし農業部門もそれなりに成長し、ヴィクトリア朝中期にはその最高の繁栄期を迎える。これは、産業革命期以前よりイギリスを支配し続けていた地主層（貴族とジェントリー）が力を維持していたことの証でもある。

2. 社会の産業構造の根本的変化が漸次進行する中で社会階級が成立したこと。

1770年代以降、“class”という言葉が「階級」という意味を持つようになり、順次、下層階級、中流階級、上層階級、労働者階級、上流階級という用語が生まれ、1840年代には中流階級と共に労働者階級という用語も一般化する。この中で最も重要な階級は、中流の中でも工業化を推進したブルジョア階級（工場主、産業資本家、商人、金融業者等）だ。彼らが信奉した自由（放任）主義はイギリス19世紀の支配思想だった。ヴィクトリア朝後期には、ブルジョアを中心とする中流階級出身者が国権の最高機関である議会（下院）で地主階級出身者を凌駕する。その上層部は資産階級化し、伝統的な地主階級と融合し、20世紀の支配層を形成していく。一方、労働者階級も中流階級と同じく重要な存在だった。彼らは工業化の進展と共に数を増大させ、しかも本来的な民主主義の主張者だった。だが国政参与は、労働党が成立する20世紀になってからで、19世紀では終始被支配階級の地位にとどまった。

序章の筆者は、上流ジェントルマン階級と中流階級の関係がギャスケルの小説『クランフォード』や『北と南』に、中流階級と労働者階級の関係が『メアリ・バートン』や『北と南』に描かれているという。また「ジェントルマン社会のパターナリズムとキリスト教の精神」に支えられた慈善活動の名目的担い手はジェントルマン階級で、実質の担い手は中流階級であり、中でもバーデット＝クーツ等の女性たちの活躍は目覚ましく、ギャスケルもその一人だったという。ギャスケルが「小説を通じてキリスト教に基づく神の愛（アガペー）の思想を表明したとい

えるとするならば」、彼女は実生活でイエスの愛の思想を実践した、と評者は考えたい。

第一部 社会、第三章 階級 —— 理想と現実

序章と第三章をセットと見るのは、第三章が序章でなされた統計等の資料に基づく説明をリレーのバトンのように受けとり、ギヤスケルの小説でそれを例証しているためだ。

当時の三つの社会階級、中でも中流階級についてはさらに細分化された複雑な階層やそれらの間の関係（尊敬・庇護関係や緊張・対抗関係等）について本章の筆者は、ギヤスケルの随筆「イングランドの一世代前の人々」の中で、上流のアップパー・クラス、中流のアップパー・ミドル、ミドル、ロウワー・ミドル、下層のワーキング・クラスというクラス分けやそれぞれの間の関係がギヤスケルの観察によって手際よく示されていると指摘する。さらに、いみじくも本書「巻頭言」が「階級の厳格な区別がヴィクトリア朝前半におけるイングランド北部の田舎町に住む年配の未婚女性たちに与えた影響を知りたければ、『克蘭フォード』を読めばよい」と言うように、本章の筆者も階級の区別についてはそれを材料にして、また階級上昇志向については『妻たちと娘たち』を材料にして考察する。下層階級については「品行方正な」者と「そうでない」者の存在とその特徴について、また使用人階級の細分化された階層区分についても、ギヤスケルの小説から説明する。

ギヤスケルが「品行方正でない」者たちの「墮落」は彼らの責任ばかりではないことを強調しているという指摘、また当時のミドル・クラスの主婦を悩ました使用人問題はギヤスケルの小説では雇用者と使用人の立場が同等か逆転して描かれているという指摘は、ギヤスケルの実人生や文学に精通しているからこそできることだろう。

第一部 社会、第四章 国家 —— 自由貿易主義の帝国のなかで

本章では、イギリスが自由貿易、科学的探検、移民によって世界に進出する政治・経済面での事実としての帝国を概念化する役割を果たしたのが小説を含めた文化だと捉え、ギヤスケルの文学に帝国がどう描かれているかを探る。

『メアリ・バートン』で、カナダへ移住したメアリとジェム夫婦の幸せそうな

生活は紹介されるが、その地の原住民の存在については何も言及されない。『妻たちと娘たち』でも、アフリカへ生物研究探検旅行に出かけたロジャーが婚約者に出した手紙に書いているのは、婚約者への愛と自分の罹った熱病と専門分野の研究のことがほとんどで、原住民への関心は希薄だ。ギヤスケルは小説の中で、労使間の階級対立への解決策を提示し、共有財産としての文化は階級を越えて継承されるべきだとの思想を示すが、それは限りなく拡大する帝国を前提としており、帝国と「互いに強く結びついている」ギヤスケルの文学は、この後の新帝国主義へと向かっていく国家の文化形成の一翼を担っている、と本章の筆者は論述する。ただ、ギヤスケルが小説執筆時に国家による帝国主義政策推進を意識していたかと問われれば、答えは「否」だと評者には思えるが。

本章の筆者は、ジョン・バートンの考えが「病んだ考え」になるのは自由貿易により輸入されたアヘンが原因であり、「自由貿易の恩恵を享受して富を築いた」工場主の息子ハリーがアヘンに蝕まれた彼の銃弾に倒れるのは極めて皮肉だという興味深い指摘をする。確かに、彼が労働組合運動にかかわるときには必ず彼のアヘン咀嚼が言及される。またギヤスケルはこの事件を単に労働者から工場主への復讐だけではないように巧妙に仕組んでもいる。嫌がるメアリを追い回すハリーの誘惑を阻止し、娘マリートの「転落」を防いだのは父親の彼だったともいえるからだ。ところで『メアリ・バートン』の第35章で、彼が墮落していったのは聖書を捨てたときからだ」と告白する。この告白の意味と殺人事件とアヘンの関連をさらに踏み込んで追究すれば一層興味深い論考になろう。

第二部 時代、第九章 子供時代 —— 天国と地獄の子供たち

本章では、イギリスの19世紀前半までの児童文学は道徳的教えを物語にして読みやすくしたものであったこと、19世紀後半になると印刷技術や流通手段の向上により児童文学市場も拡大され、子ども自身に好まれる、子どもの空想力を誘う『トム・ブラウンの学校生活』、『不思議な国のアリス』等が出版され、20世紀前後には『ピーター・ラビット』、『ピーター・パン』等も世に出て、ヴィクトリア朝期の児童文学が黄金期を迎えることなど、イギリスの児童文学史をヴィクトリア朝以前からそれを過ぎた時代に亘って概観する。その中で本章の筆者は、ギヤスケルの児童文学はファンタジーが乏しく教訓的要素の強い前近代的なもの

で、見劣りすると評価する。ギヤスケルの子ども向け物語の「手と心」のトムはよい子過ぎるが、「ベッシーの家庭の苦勞」は労働者家庭の生活感が溢れているという本章の筆者のコメントには全く同感だ。

本章では、ギヤスケル以外の作家の作品への言及は豊富で、社会の子どもへの対応について読み応えのある論述がなされているが、「ギヤスケル文学を通して」という本書の狙いからは少々ずれているようだ。しかしそれは逆に、ギヤスケルが児童文学創作にはあまり熱心でなかったことの証拠ともいえる（ただし、ギヤスケルが子どもに無関心であったというのではない）。ただ、ファンタスティックな「本当なら奇妙」は、お伽噺の世界の人物が登場するが、大人向けのスウィフト流の風刺であろう。

第三部 生活、第一四章 娯楽——明日も働くために

本章では、当時の記録文書や新聞等から、この時代の娯楽は上の階級の者が労働者の福祉のためというより、彼らの不満のガス抜きのために勤めたという。支配者、雇用主にとっては、労働者がチャーティスト運動や労働組合運動よりも、知的好奇心を満足させる学問に向かうほうが好都合だ。戸外での昆虫や植物の採集は労働者の健康にもよい。労働者が庭つき家を持つのは無理にしても、鉢植え等で楽しめる園芸も生活を豊かにする。『メアリ・バートン』中の労働者ジョーブ・リーは組合活動には消極的だが生物学には熱心で、昆虫採集と標本作りに興じる。幸せだった頃のバートン家の窓辺に置かれたジェラニウムの鉢植えは一家の主婦の趣味だけでなく生活状況も示す。一方、この時代に流行し始めた鉄道旅行は中流階級だけでなく労働者階級にも広がる。ただしロンドンへ上るバートンの場合、都見物の楽しみよりも請願の拒絶による失望が強調されており、労働者の悲惨な困窮状態を世間に訴えるこの小説の意図に沿っていると指摘する。

本章の筆者は、ギヤスケルが描く労働者の娯楽は支配階級が望ましいと考えるものに合致しつつ、労働者自らが選んで楽しむところが特徴だ、と結論づける。この点は中流階級に属し、人々を司牧する牧師の妻という彼女の特徴をよく捉えているといえよう。

第四部 ジェンダー、第十九章 ミッション —— 女性の使命と作家の使命

本章はヴィクトリア朝時代の女性の作家としてのミッションについて論じる。19世紀のイギリスでは、公的領域は男性の領域で、女性の領域は家庭とされた。女性が職業として執筆するのは女性本来の義務である家庭の仕事を妨げ、ドメスティック・イデオロギーを揺るがすことになるというので問題視された。ギヤスケルは『シャーロット・ブロンテの生涯』の中で、サウジーが「文学は女性の一生のビジネスとはなりえないし、またそうなるべきでもない」とシャーロットに忠告したという。しかしキリスト者であるギヤスケルは、神より与えられた才能を活かすのはクリスチャンの義務であり、女性が果たす家庭の義務はその最たるものだが、その上例えば文学作品執筆という特別の才能を与えられた者はそれを自分の楽しみだけでなく世のためにも活かすべきだと主張し、執筆はビジネスでなくミッションだとして正当化している、と本章の筆者は論述する。

さらに、G.H. ルイスの記事「芸術作品にモラル（道徳性）は必要か？」に言及し、ブロンテはためらいなく芸術性のために、ギヤスケルはあくまでモラルのために執筆した、と論を進める。ただ、ギヤスケルはミッションという大義名分を楯にして執筆し、社会からの攻撃をかわしたが、これは書きたいという衝動を隠すためだったともいえる。『シャーロット・ブロンテの生涯』の底には、伝記に描かれたブロンテだけでなく、描いたギヤスケルの、双方の女性作家の執筆への根源的願望が存在する、と結論づける。

本章にはギヤスケルとその友人であったブロンテにかかわる言及が多く、本書の日本語の題『ギヤスケルで読む……』に沿ったものといえる。

第五部 ジャンル、第二章 ゴシック小説 —— ヴィクトリア朝のシェヘラザード

本章での文学分野についての論述は明解で説得力がある。ゴシック小説についての「越境文学」としての本質、そしてこのジャンルの成立期からユング理論を経て20世紀に至る歴史 —— 『オトランド城』（1764）で成立、流行のピークはイギリスでは18世紀末から19世紀初頭、ヴィクトリア朝期を前に衰退、しかしゴシック的要素はこの時代のリアリズム文学に取り込まれ、恐怖の舞台が中世の城でなく闇をなす個人の内面となり、20世紀にはユング心理学の文学への応用により登場人物の抑圧された心理を表象する文学となる —— を手際よく概観する。

その後、ギャスケルのゴシック的短・中編小説「グリフィス一族の運命」、「貧しいクレア修道女」等を取りあげ、これらが、ゴシック小説の「越境」的要素や〈偽装〉というゴシック的手法によって、例えば安息の場である家庭が牢獄ともなるなど、当時の家父長制社会の暗部や社会規範の不公平さ、また当時はタブーであった抑圧されたセクシュアリティ、中でも女性のそれと無意識下の闇をも表現している、と論を進める。

ギャスケルが長編執筆の際、キリスト教的人道主義作家としての使命感から、文学形式や主題の選択に制約を加えているが、匿名で発表されたゴシック短編にはそれがなく、当時問題視されそうなテーマも描けたとの結論に至る。しかしギャスケルは長編においても、世間を騒がせそうなテーマを、それこそ巧みな〈偽装〉的手法で扱っているようにも思われるが。

第六部 作家、第二十九章 ユーモア —— 二つの系譜の継承と円熟

芸術評論の方法には、作品を芸術的観点から論じる方法と、時代背景も視野に入れて見る歴史的観点から論じる二つの方法があるといえよう。本書は基本的に後者に立っている。しかしこの第二十九章は、ギャスケルの文学を時代の社会的背景から離して、デイヴィッド・セシルやウォルター・アレン等のイギリス評論界の代表的意見を手際よく紹介して、ギャスケル文学の本質 —— 創作世界が人物ゆえに生きている —— を示す。

ヴィクトリア朝前半期には確かに、自由競争の能率主義で成功した者たちがいる一方、失業した困窮労働者たち、社会規範を踏み外し社会から放逐された女性やその子どもたち、男性に好都合の基準から教育され人間本来の生を否定された女性や子どもたちもいた。本書の執筆者の大半はこのような時代の非人間的暗黒部を歴史書、記録文書等のノンフィクションや、ギャスケルや同時代の作家たちのフィクションを通して克明に示す。確かにこれがこの時代の社会の実相なのだろうが、それがすべてだったのか。息苦しくなりながら分厚い本書を読み続けてきて、3月11日の東日本大震災の報道に絶望的思いにとらわれたとき、あと一章を残した本書の第二十九章に評者はほっと安らいだ。

本章の筆者は、時代や場所を越えて変わることなく価値があり続ける芸術は人間を描いてのものだから、上記の評論方法のうち前者をとる。ギャスケルの小説

をオースティンの小説と比べて、そのユーモアとペーソスと詩情について考察し、『クランフォード』がセシルのいうゴールドスミス流の思い遣りに満ちたユーモアの系譜にあるなら、『妻たちと娘たち』はオースティン流の風刺のユーモアの系譜にあるという。しかし『妻たちと娘たち』のユーモアは、「オースティン以上に繊細で、情感に富み、寛大である」と論じる。それはこの二人の作家の人生の相違——一生独身で、40代早々に亡くなった頭脳明晰な作家オースティンと、信頼できる夫をもち、4人の子を育て、感情豊かな、心の練れた善意の女性のギヤスケル——から生じたとする。『妻たちと娘たち』は「アレンの云う旺盛な社会意識」、「セシルの云う社会的構造のリアリティに対する洞察力と優れた人物創造」によって「ギヤスケルならではの世界の存立が見事に調和し、ギヤスケルの大きな魅力であるユーモア精神が発揮された」彼女の代表作と評価する。

本章は主として芸術主義に立ちながらも、ギヤスケルの実人生をも射程に入れ、歴史主義的側面も考慮した、つまり本書の意図を十分に汲んだ論考といえる。

本書を最後まで読んで、19世紀のギヤスケルの文学が21世紀の今日に果たして価値があるのか、という疑問を抱く読者も多いことだろう。編者のそれへの解答は、「まえがきに代えて」に記している「彼女の小説は昨今の日本における格差社会の種々相に見られる問題を分析するために格好の材料を提供してくれるばかりか、問題解決の糸口を見出すのに有益なアイデアを示唆してくれる」である。

ギヤスケルは経済学等の学問には疎かったが、労働者など社会的弱者の苦悩は熟知していた。彼女の小説には苦しむ人が大勢登場する。しかしクリスチャンの彼女は苦しみには意味があるということの人々に発信しようとして小説を書いたともいえる。ギヤスケルの小説が現代の問題解決に直接、解答を示すことはないにしても、いつの時代にも、どこの国にもいる苦悩する人たちが、ギヤスケルの小説を読んで、苦悩は負の要素でなく、人を強くするものだと思えば、人生に希望を抱くことができれば、ここにこそ、ギヤスケルの小説の時代を越えた存在意義があるように思える。

本書の各論考から、ヴィクトリア朝前半を研究する上での問題点や方法について有益なヒントを得られる。各論考に付けられた注や興味深い図版、日本語・英語併記による詳細な索引、広範なギヤスケル文献一覧、何よりもギヤスケルの小

説を丁寧にした上での論考には、彼女の文学を愛好し研究する誰もが本書の大きな価値を認めるだろう。

それだけに、ラム叔母（ラム伯母が正しい）や、ギヤスケルの小説の読み方の勘違い（ルースが看護するのは伝染病に罹ったダンで、ドーヴァー行きの乗合馬車の事故に遭うのはブラドショーの息子。ジョン・バートンの息子の死因は猩紅熱といえようが、妻の急死はその十年余り後の別の出産時）は論旨全体に影響はなくとも、細心の注意を払って欲しかった。

（ノートルダム清心女子大学教授）